

つたまま、受話機を取った。それは目が覚め次第會見したいと上杉からの傳言を看護婦が取次いでゐるのであつた。

「直ぐに行く」

と答へて置いて彼は跳ね起きた。もう夏の日差しは、雨戸を閉めない椽の障子の中途にぼつと桃色の影を染め出してゐた。眠らなかつた積りでも四時と五時とを聞かなかつたのは眠つた證據であつた。

彼は直ぐ洗面所へ、それから室に引き返して外出着に更へた。胸は頻りに騒いだ。

「あゝ凶か吉か」

大瀬は溜息を吐いた。

藥の爲に相違なからう。上杉は久し振りに宵から安らかに眠つた。而して目が覺めたとき周圍は不氣味なほど静かで寂しかつた。遠くの醫局の方で動いてゐる時計の振子の音さへ微かに聞えてゐた。枕元の臺の上に脱いで置いた腕時計を取つて、塵紙を透して室内をぼんやり照してゐる電燈の朧ろな光で針を查べた。十二時を少し廻つてゐる。

眠る前に着更へさせられた患者用の寢衣は、汗で背筋と袖口とは柔かとなつたが、襟がごそごそと首根を摺つて痛かつた。

玄關から診察室に運ばれて、直ぐ、此の寢室に移されたので、病院内の様子は薩張りわからなかつた。窓の上部の硝子戸を五六寸滑べらせた間から星がきらきら燦めいて冷たく覗いてゐるやうに見えるた。

彼は寢臺の上に起き直つた。彼には眠つてゐる間が唯一の隠遁所であつた。

眼が覺めると直ぐに、彼は自分の目下の地位を復たしても思ひ浮べない譯には行かなかつた。彼はスリツパアを足で探ぐつて突掛けると、電燈の笠に捻つてあつた塵紙を取つて除けた。足音を忍ばせながら、戸口の方へ歩いて行つた。扉は開いたまゝで白い金布のカーテンで室内を隠してあつた。それを靜かに左手で除けて外を覗いた。十ワットの電燈が高い廊下の天井にぶら下がつて、油を塗つた板が鈍く光つてゐるだけであつた。どの室も同じやうに白い布が戸口を塞いで灯影を映してゐた。

彼は安心して奥に引き返すと、音を立てないやうに折靴を曳き寄せて、中から便箋を取出すと、ペンの穂筒を抜いた。

折靴を裏返して寢臺に置いて、便箋を載せた。彼は椅子を運んで来て、其の前へ据へて腰を卸した。彼は帯の間を探つて四角な小櫃を取つて折靴の横に列べた。それは彼があの上の偉人の墓のそばで、數日前の或る夜、手に持つてゐた同じ品であつた。霞のやうな白い結晶が眞綿を曳いたやうに櫃の内部に充ちてゐた。

彼は胸がわくわくと躍つた。誰かに追ひ掛けられてゐるやうな焦燥が彼の心を襲つて來た。「落着いて、落着いて、狼狽することはないんだ」と彼は自分に説き聽かせた。

彼は震ふ指先にペンを挿んで、

「貴下が此の腐れ果てた殘骸に寄せられる同情には深く感謝します」

と細かに書き卸して、更めて盗むやうに四方を見廻した。

彼は暫く紙面と小蠧とをぢつと見比べて考へ込んだ。

自分の今實行しやうとしてゐることが他愛もない馬鹿氣たことのやうに思はれた。彼はペンを置いて、便箋をベリベリと剥いで丸めて寢臺の下に放投つた。

「それなら此所から何所へ行く」と自分に尋ねて見た。先途は全く暗澹として眞つ闇であつた。彼は頭から黒い布で被されたやうに感じた。深い溜息が彼の塞いだ胸から鼻に抜けた。

彼は起ち上つて窓に倚り沿つて、靜かに忍びやかに硝子戸を押し上げた。涼しい風がすつと室内を流れて便箋を煽つた。

細い鍋弦のやうな月が町家を遮つてゐる庭の隅の杉の頂に半分姿を見せてゐた。彼は此の室を抜け出して、誰も來る虞れのない世界に遁れやうかと感つた。然し案内を知らない此の風來の身には何所を如何たどつて好いかとわからなかつた。萬一失敗した場合の大人氣なさを想像して自分で羞ぢた。

「一旦、斯うと定つたものを場所が何んだ」

と彼は思ひ返した。

「斯うぐずぐずしてゐるのは、死が恐ろしいのか」「卑怯者。此れほどの屈辱を忍んでも貴様は生きてゐたいのか」

と彼は自分を叱つた。

不圖、彼は思ふまい、思ふまいと拂ひ除けてゐる遠い都に遣して來た……考へてはならない優しい温かな笑顔が胸に浮んだ。紅白の花を片手に、にこやかに振り返つた白い顔が眼の前に甦つた。

「此の未練者ツ」

と彼は頸を激しく左右に振つて其の記憶を碎くやうに眼を瞑つた。眼を瞑ると其の姿は彼の肋膜に明瞭に彫り込まれた。大瀬の熱の籠つた語が一つ一つ耳に轟いた。

彼の頭は混亂した。彼はがたがた震へながら寢臺にたどり着いて、其の鐵の杵をがつしと握つて唇を噛んだ。彼は再び襲つて來るであらう心悸昂進を覺悟して右手を襟に突つ込んで胸を押へた。にちやりと汗ばんだ皮膚は高く鼓動を傳へてゐるが、寧ろどくどくと緩く打つてゐた。

彼は途方に暮れた。唯だ一口、小蠧を唇に當て、内容を移しさへすれば事済む、其の簡單な所作が、彼にはどうしても出來なかつた。もう一眼逢ひ度かつた。自分の不覺が本心からの行爲でなかつたこ

とを訴へたかつた。譯のわからない涙がぐんぐんと咽喉に押し上げて來た。彼は此の朝、聽くまいと藻掻きながら大瀬の述懐を一語漏らさず鼓膜に刻んでゐた。「何と言ふ残酷だ」。彼には大瀬の無理解が怨めしく呪はれた。

彼は進退谷まつた。よろよろよろけると、突然、板の床に膝を撞いた。座靴を脱いで、きちんと座つた。彼は身を堅めて両手を床について頸垂れた。

「あゝ神よ」

彼は微かに呟いた。眼からはほろほろ雫が床に落ちた。五里霧中を漂泊うやうに、彼は胸の遠い遠い彼方に僅かに消え残つた記憶をたどつて、果敢ない存在へ辛うじて呼び掛けた。

「死ぬことさへ出来ません。……硫黄と火とを降して……此の蛆虫を……焚き殺して下さい……」
と彼は苦悶に喘ぐ息の下から、我無遮羅に叫ぶと、我ながら自分の語にハツとして周圍に血走つた眼を投げて見廻した。

眞闇な深淵が膝の前に口を開いて彼を呑み去るやうな恐怖が彼を襲つた。彼は全身の血が頸筋を逆

に頭に駈け登るすうすう轟く音を感じた。膏汗が脇の兩側から滲んだ。
彼は畏ろしい何者かゞ身近く迫つて來るのを覺えた。彼は驚いて振り返つた。然し室内は依然として不氣味なほど靜かで、寂しかつた。硫黄も降らねば、焔も燃えなかつた。

彼は寢臺の上の小蠟を暫く視詰めた。

「おれはそれほど此の醜い骸が惜しいのか」

とも始めに戻つて考へて見た。彼は再び起ち上らうとして、何者かに頭をがしと押へられた。

「神よ……」

彼は啜り泣きながら、壁に打ち着かつたやうな心でもう一度呼び掛けた。

「死ぬとおつしやるなら死にます……此の卑怯者を憐れんで下さい……」

自我の弾力を全く失つた彼は本當に絶る心地で祈つた。

「私には罪を赦して下さいと御願ひ申し上げる権利がありません。……せめて此の弱い心から、此の誘惑を拂ひ除けて下さい……」

彼の自負心も矜も、過去も、現在も、もう彼には碎け盡した。

「あゝ神よ……此の……言ひやうなき罪人を憐れみ給へ……」

彼は奈落の底に蠢きながら狂ひ廻る蛆虫のやうな思ひで自分を眺めて、遙かの……トルネルの暗闇の中から微かに輝く行先の日光を望む心地で目に見えない存在に訴へた。

潮が退くやうに稍や不安が風ぎて、心が聊か落着いて來た。

彼は膝を起して寢臺に縋りながら辛うじて立ち上つた。

彼は身動きもせず、ぢつと考へ込んだ。雑多な感慨が入り亂れて、彼の胸の中を駈け廻つた。彼の頑固な自我の鐵扉は今碎かれた。彼は此の殘骸をどう處置して好いかゞ唯だ惑であつた。

二人の客は東九州の湯の都の驛前、スイス旅館に昨夜から投宿してゐた。

旅館は主人の主義とあつて旅客を家庭にゐるやうな雰圍氣に包まうと言ふので、甚だ居心地が好かつた。大瀬は何所かの宗教雑誌の廣告にそれを讀んでゐたのが、憔悴して此の病んだ友を伴れて此所に落着いた理由であつた。主人が舊滿鐵會社に奉職した人だとか言ふので斯うした階級の客の要求を好く心得てゐた。館の拭掃除は主人自ら箒を握るし、賄は主婦自ら庖刀を取るとの噂であつた。

彼らは昨日半日をあの出來事の多かつた小都會に費して、午後の汽車で四時間かゝる此の湯の町に夕暮到着して一夜を過した處であつた。昨日は終日二人は互に餘り口を利かなかつた。それは上杉のまだ動搖する心に強い刺戟を與へることを大瀬が危んだからであつた。

朝の湯の町は爽やかであつた。軽い朝食を今濟したばかりの二人は三階のベランダの籐椅子に打ち寛いでゐた。旅館の主人は其の室に「ニウヨルク」と言ふ奇抜な名を與へてゐた。

「どうも一方ならない御心配を掛けました」と上杉は今朝となつて始めて問題に觸れた。

「いや、御無事で居て頂いて私こそ救はれました……こんな話はもう止ませう」と大瀬は横を向いて、折重なつた人家の屋根を越えて、遠く擴がつた心地好い夏の朝の海を眺めた。

右手には標高百五十呎と立躰地圖に載せた高崎山が、ぬつと海に突き出てゐた。まだ瓦の照返しが漂はない海からの涼しい風は、浴衣の彼らの襟から冷々と忍び込んだ。

「僕はつくづく考へてゐるんですが、罪に惱んでゐるなどは嘘の皮で、實は同僚や學生の反感や侮辱を恐れて見たり、世間の思惑に度を失つてゐたゞけなんです」

「今からはさう思はれるのも御尤もでせうが、必ずしもさうばかりぢやなかつたでせう」

「いゝえ、實際さうとしか思はれません。今こそ本當に私は、私の爲に傷いた學院の爲に小使となりだつて、せめて學生たちへのデモンストレーションの資料にでも利用して頂けたら仕合せだと存じます。それがせめてもの私の懺悔です。私はもう私自身を棄てゝゐるんです」と上杉はぢつと俯向いて椽の板を視詰めて、溜息を吐いた。

「私は私の爲に生きてゐる望みを棄てました。大瀬君、學校の爲、學生の爲、必要とならば此の殘骸を何時でも投げ出します……とは決心してゐますが、今後を思ふと私は果して其の試煉に堪へ得るかどうかが唯だ不安なんです」

と述懐した。

「その御覺悟があれば充分でせう。誰にでも過失もあれば、方向こそ銘々異つても罪があります。私は貴君の今後の地位が決して氣樂だとは思ひません。数年の間は随分苦勞なさるでせうし、或は永久に貽るものもあるかも知れません。事ある毎にそれがもの言ふ御覺悟も必要かと存じます。然し試煉はどれほど深刻でも必ず血路は備へられます。どうか、死の覺悟をなすつた際の御心持ちで戦つて頂きたいですね」

と大瀬もしんみり言つた。

「大瀬さん、どんなに合理的と考へられても、正直、冷靜な心で自殺は中々出来ないものですね。卑怯なのでせうか」

と上杉は寂しく笑つた。

「私はそれが當然だと信じます。不自然なんですからね」

と大瀬は上杉の様子を盗み見ながら答へた。

「大瀬さん……僕は今『活ける基督』と言ふ感じが、甚だ強いのですが、同時に貴君のおつしやる我ならざる我と言ふ意味も、ぼんやりわかつたやうな氣がします。唯だ……罪の贖とか赦しとか、どうも理解が出来ません……どうにかして自分の不都合な行爲の責任は懸命に負ひたいと願つてま

す」

と上杉は現在の胸中を卒直に告白した。

「私から見ると、それが暗黙のうちに基督の事業を柔順に承け容れてゐられる結果だとしか考へられないんですがね……兎も角、私から彼れ是れ説明する必要はありますまい。どの方面にも貴君の天稟を傷けないやうに育て、頂けたら……。どうして試煉に堪へ得るか、どうして誘惑と戦ふか、御互の生涯は寸刻の油斷も出来ませんか……」

大瀬は現に人の事を語つてゐるのか、自分自身の身の上を打ち明けてゐるのか、區別がわからなかつた。

二人の間にはそれつきり話の緒口が絶えた。相互に己の問題を考へてゐた。

太い汽笛が後の山々から轟いた。前面の海上遙か大型の汽船が此方に舳を向けて、船首に白波を割いて進んで來た。

けれども上杉はそれに振向うともしなかつた。彼は此の數週の慘めな生活を回想してくだらない不仕末が、如何に擴大した波紋を其の身邊到る處に巻き起したかを思ふと、今更自分の不覺に身震いせられた。それは一杯の羹の爲に家督の權を賣り渡した古い歴史の馬鹿者そのまゝの愚劣な所業であつた。爲す必要もない餘事に身を投げて四方八方に由々しい問題を惹き起した。

「それから上杉君……」

と大瀬は今舳を高崎山の方角に向けて人家の屋根に乗り掛けて来る汽船を眺めながら氣忙しく口を切つた。

「突然ですが、貴君はもう斯うなつたからには……例の貴君を索めてゐる一家の願を無視なさらないでせうね」

と大瀬は切り出した。

上杉のやうやく快活になり掛けた態度は、急に見る見る悄氣て來た。唇を結んで、俯向いた彼の憔悴した顔からは一層に血の氣が褪せて來た。彼は身じろぎもせず石のやうに黙つてゐる。やがて心臓病患者のやうな深い溜息を幾つか重ねて吐いた。

「どうです」

と大瀬は迫つた。而して意地が悪いと邪推せられるほど上杉の顔色を凝視めた。

上杉の眼には段々涙が滲んで、今にも零れさうになつた。然しやはり口には一言も出さなかつた。

「實は貴君には御相談しませんでしたけれども、今朝、貴君の御様子を伺うと直ぐ、電報を打ちました」

と大瀬は始めて隠れた彼の策動を白状した。それでも上杉は別に驚いた所作は見せなかつた。

二人の間には再び語が途切れた。大瀬は何か探し求めるやうに屋根と屋根との間に姿を見せたり隠したり、波止場に近づいて来る汽船を眺めてゐた。然し勿論遠方なものと物に距てられて海岸の工合は此處からは見えなかつた。

「御免下さい」

と室を中にした廊下から主人の吉田氏が訪れた。大瀬はそれをしほに椅子を離れて座敷へ歩み込んだ。

「鶴見園にでも御出でになるのですしたら、自動車を呼びませうか……それとも何處か地獄廻りにでもお供させませうか」

と主人は敷居の際で小腰を屈めた。

大瀬は暫く考へてゐたが、

「今の汽船は何丸でせう」

と別な問を掛けた。

「あれは紫丸で御座います」

と主人は答へた。

「さう……でしたら、もう一時間ばかり待つて頂きたいですね……都合では何處かに御案内を願ひませう」

上杉は二人の問答を聞くと不安の眼を大瀬の後姿に投げて、狼狽したやうに椅子から立ち上つた。

「唯今龜ノ井から御使が参りました。直ぐ御客様が此方へ伺つても御差支へはありませんでせうかとの事で御座います」

主人は再び部屋の敷居際に小腰を屈めて椽の二人に尋ねた。大瀬の顔は喜びの微笑が漂つた。彼の方寸は事毎に成功した。

「直ぐ御出で下さるやうに御返事を願ひます」と主人に答へて、

「さあ上杉君、サアプライスだ。サアプライスだ」

と大瀬は浮き立つやうな調子で立つたまゝ上杉を見下して叫んだ。

「大瀬さん、御計畫は大抵想像が出来ますが……私はまだ考へが纏つてゐないんです……」

と上杉は眼を伏せて呟いた。大瀬はそれを聞き流して、浴衣を着更へる爲に自分の室へ降りて行つた。一人取残された上杉は「親切からだらうが、迷惑なことをする」とも考へた。然し流石に懐しく慕はしい情念と、屈辱、羞耻、慚愧、自己に對する憤懣と入り亂れた感慨が忙がしく胸を埋めて來た。彼はどう身を處置して好いかに惑つた。

暫くして大瀬と老夫人との聲が二階からの梯子に聞えると、多人數の足音が此の室の前にたどり着いた。上杉は狼狽して椅子から離れて座敷の中央に立つた。

「さあ富美子さん」

大瀬の聲が上杉の耳には微かにしか聞えなかつた。霞んだ周圍の人の姿の間の、不安を漲らした白い顔に上杉の涙に沁んだ眼は釘着けられた。

昔、異邦人の使徒は、彼の生活に驚天動地の一大回轉を餘儀せられたとき、直ちにアラビヤの荒野に隱遁した。勿論上杉は彼の大使徒の足蹟を踏まうなどと言ふ思ひ揚つた自惚は有つてゐなかつた。彼は其の新たに受けた異常の經驗を整理すると同時に、敗殘の彼に尙ほ根柢から信頼を破壊し盡した舞臺で、其の使命を遂げる餘地があるかを工夫し、準備するために、此所都の東北一千メートルの沖天に聳つ高嶺へ隠れて、慎ましやかな自炊生活を營んでゐるのであつた。

それは然し深山でも決して外部は靜寂ではなかつた。皇居鎮護の靈山として、一千餘年の昔、某の大師が開いた聖域も、今は文明の施設の爲に、あたら俗人、甚だしきは放蕩兒の酔醒しの散策に妄用せられる遊覽地と化した。而して此所に索道を架設した電氣會社と年中行事を辻ビラで宣傳して客を

引く本山は開祖の餘澤にほくほく得意となつてゐるのであつた。

登山索道の山上停留場を左右へ段々に尾根を開いて澤山の別荘が建てられてゐた。上杉の密かに隠れてゐるのは其の北尾根の三段目、索道の客車の屋根を真下に見る斷崖の上にあつた。大瀬牧師の知人で、或る百貨店を經營してゐる敏腕な事業家の所有の山荘であつた。

停留場から山頂へは午過ぎから、夜半に掛けて、もう此の季節には夥しい遊覽客が混み合つた。然しまだ避暑には少し間のある今頃、別荘地帯は静かであつた。殊に夜に入つては時折り、ずつと下段の遙か彼方にある基督教女子青年會の「山の家」に若い婦人のさゞめく聲が聞えるだけで、不氣味なほど寂寞であつた。

山上の夜は静寂とともに、ネルを着ても肌がひやひや寒かつた。上杉は蝦茶の絨氈を敷いた床に、「二月堂」の經机を前に据えて、きちんと正座してゐた。

停留場のアアク燈が東側の薄いカーテンを透してきら／＼きらめいてゐるのが、却つて一入の寂しさの不氣味さを加へた。

左に眼を向けると南の窓の硝子戸の遙か遙か彼方、下界の灯影が鋸屑に火を點けて一面にばら撒いたやうに大地を蔽ふて何處までも擴がつて見えた。諸所にごちやごちやと集つて眞紅の燈の見られるのは盛場のネオン・サインと受取られた。もう山上へのケエブル・カアは夙くに停止してゐるが、麓

と都とを繋ぐ電車は、まだ額に明々とライトを輝かして地の底を匍ふ流星のやうに走つては人家に隠れ、林を潜つて往還してゐた。然し一際の影響は一千メートルの大氣に遮り留められて、乾坤一切無言の行を續けてゐる。

經机に上杉は新約全書と二三冊の註解書を開いて、じつと読み耽つてゐたが、聽て眼を瞑つて思ひに沈んだ。

今や彼は眼に見えない存在者の實在を暫くも忘れることの出来ない身の上であつた。イヤ其の存在を暫くも忘れ、ば忽ちに狂暴な野性や慾望が彼自身斯くの如き過去を有する身分でありながら、敢て他人と其の才能を比較し、身の程知らない、以前の卑劣な自負心に驅られたり、同僚を凌いで獨り得意にならうとする野心に直ぐ煽られて彼彼の舊き人を再び生かさうと迫つて來たが故に、其の存在と寸刻も離れることが出来なかつた。

思ひ返せば彼があんな果敢ない失敗に陥るのは彼には當然な成行と感ぜられた。彼は始めから自己の野望に至高の權威者を驅使してゐるものに過ぎなかつた。至聖の存在者を唯だ名目として實は自己の思想に、思想？ 自己の愚劣な無智を基礎として築いたインチキな考へに由つて活動してゐるものに過ぎなかつた。罪と言へば、自己の陥つた行動の如きは唯だ當然なものが當然に出現したに過ぎなかつた。腫物が出来るのは腫物の部分の腐敗にのみよるのではなかつた。其の毒は血の中に盛られて

全身を循環してゐるからに外ならなかつた。至聖者をすら冒瀆する身に、何の教育があらう、何の指導があらう。彼が學生を如何に見たかは、今の心事を以て見れば誠に赧面汗顔の至りと言はねばならなかつた。畢竟は學問の名に於て彼の卑陋な野望を感染せしめてゐるに外ならなかつた。彼は何よりも先づ其の暴慢、其の不遜、其の不虔の恐るべきに戦いた。

にも拘はらず、不純、不潔、不義の彼が、愚にもつかない^{II}と彼には感ぜられる^{II}行動に行き詰つて、訴へたとき、其の至聖者は彼を見棄てられなかつた。攝理の御手はあの情誼のために全く自己を棄てた愛友を活躍せしめられた。飽まで低級で、無智で、驕慢な彼に其の御姿を示された。基督に於て見得る至聖者こそ彼が今其の現前に立ち得る存在であつた。

然しながら其の至聖者に訴へ得たのも、戦きつゝ近づき得たのも、大瀬が口を酸くして説く、又常に彼が讀み得、學び得てた基督の十字架の犠牲に由つて、其の罪を贖ひ、其の罪を赦し給ふ特性が、潜在意識として彼を動かしたものでなかつたか。基督に由つて其の事業を行ひ給ふ至聖者なればこそ彼は絶るを得た。絶望の下から訴へるを得た。

而してあの下劣であつた身を、今は祈るに従つて、絶るに従つて、新たな感銘と刺戟とを與へて、其の至聖者のため、世の人のため、殊に愛する後進のために、其の肉を與へ、血を注ぐとも惜しくない、詐りなき者と呼び起さしめ給ふ。我ながら過去の我とは何たる距離であらうか。然かもそれはあ

の不仕末を以てして尙ほ我を棄て給はない至聖者の特殊の召命である。彼は特選を被つた……彼の肉が、あの不態な失敗者が……何と言ふ矛盾であらう、何と言ふ恩寵であらう。

上杉は思ひ至つてはらはらと涙が頬を流れるのであつた。

彼は此の至聖者をあの愛する後進にどうしても彼が仰ぐやうに植込まねばならない衝撃に心が燃えた。硝子戸の彼方、南の尾根に隠れて、彼の眼が戀い求める校舎は見えなかつた。それはすつと此の嶺に繼ぐ東の山脈の根元ねもとに建てられてゐたからであつた。然し彼は其の校舎が現に眼に映る心地がした。彼は會つて下眼に見た青年たちが、今は彼よりも更に貴く潔い生物であることを感じた。小使となつても好い、庭掃となつても好い、既に一講師たる價値もないものとして大瀬に託して辭表を呈出してゐる。が、然しよし門衛の一使丁となつても、イヤ、此の肉を刻まれ、此の血を啜らせても好い。あの愛する後進の同志に此の新たな發見を傳へ、同様の意識に立ち、感激に浸らしめねば生きるかいないことを覺悟するのであつた。

彼に一身を獻げたあの純潔な淑女に對して、彼は其の半生の苦闘を扶けられるであらう代りに、其の徳を樹て、其の靈性を培かうため一生を更に深刻な下劣な自我との戦ひに獻げられねばならないことを感じた。

此の彼には全く新たな覺悟は何處から來るか……彼は無限の恩寵の注がれる基督の事業に由つて示

された至聖者の前に、ぶる／＼震へながら頭の暫時に壓伏せしめられるのを感じた。
「あゝ神よ、基督に由る、爾あなたの恩寵を感激致します」
上杉の膝には生温かい雫がぼとりぼとりと落ちた。

鐵扉を碎いて 完

昭和八年十月十一日 印刷
昭和八年十月十六日 第一刷發行

鐵扉を碎いて
定價六十錢

版權
所有

著者	日 高 善 一
發行者	名古屋市中區流川町二十番地 横 井 憲 太 郎
印刷者	名古屋市中區流川町二十番地 横 井 秀 子

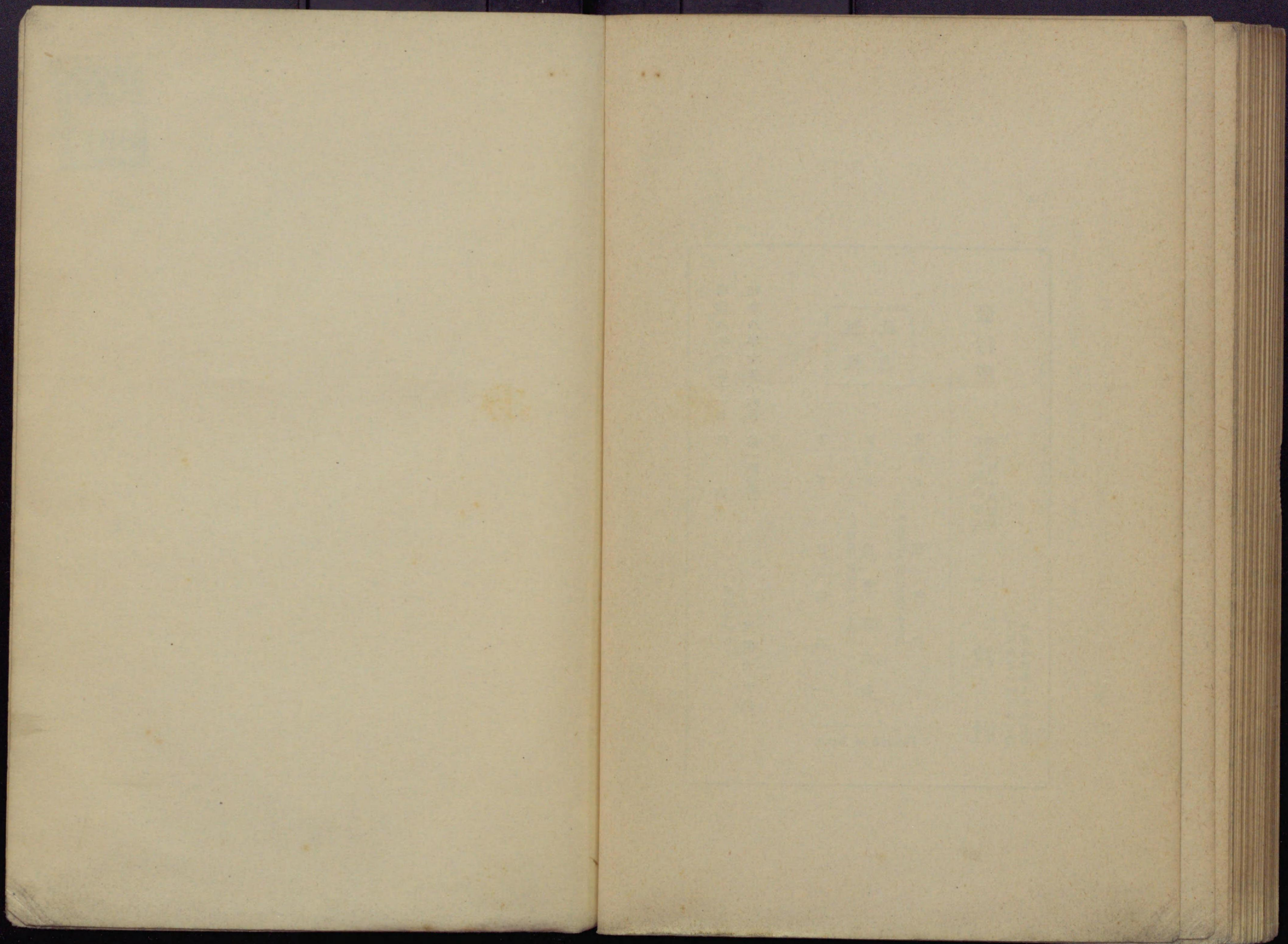
Printed in Japan

發行所

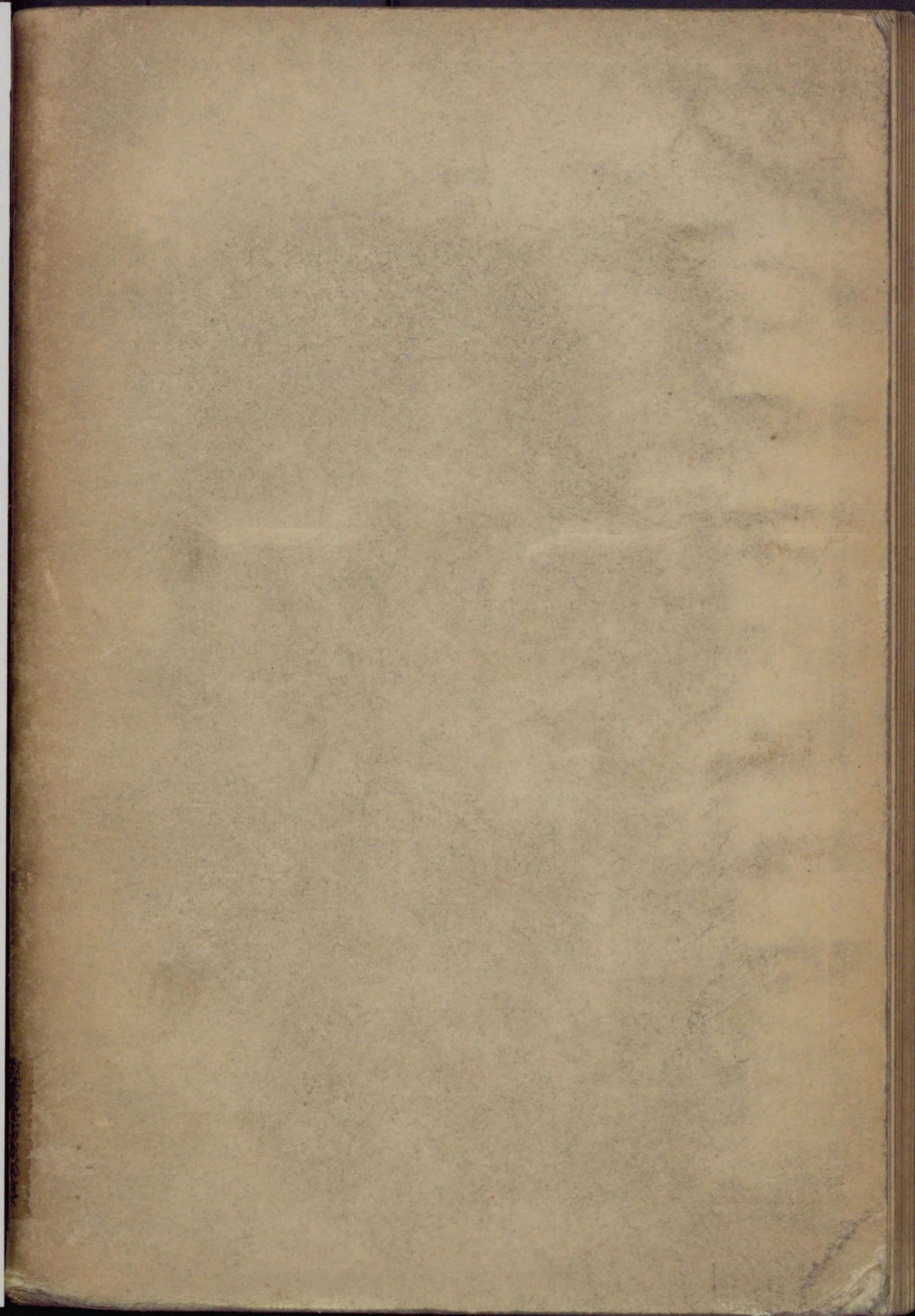
名古屋市中區
流川町十八番地

一粒社

電話中(3)四三〇二番
振替名古屋九四四五番



643
186

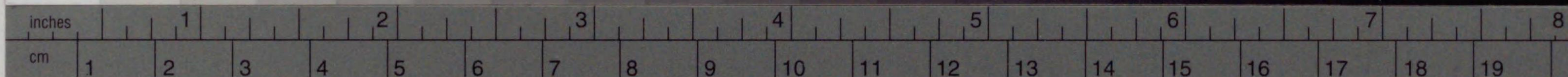


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

